

内外交差点

MaaS時代のタクシーの再定義 進展によって“主役”になり得る

日高 洋祐氏 (MaaS Tech Japan代表) 第1/12回

近年、MaaS (Mobility as a Service) という言葉が交通業界でも頻りに聞かれるようになりました。ICTやデータを活用して、複数の交通手段を一つのサービスとして統合し、シームレスな移動を実現するこの概念は、単なる流行語ではありません。日本の地域社会における移動課題、そして交通事業の持続可能性に対する一つの解決策として、実践フェーズに入っています。

こうした中で、「MaaSや配車アプリが普及するとタクシー会社は埋もれてしまうのではないのか」「大手IT企業やプラットフォーマーに主導権を握られてしまうのでは」と不安の声をいただくことも少なくありません。しかし、私自身は逆に、MaaSの進展によってタクシーの価値が再評価され、むしろ“主役”になり得ると考えています。

そもそもMaaSの目的は「人をスムーズに目的地まで届ける」ことにあります。いくら時刻表が揃っていても、幹線交通だけでは生活は成り立ちません。ドア・ツー・ドアで柔軟に対応できるタクシーは、MaaSの中でも最も生活に密着した「移動のラストワンマイル」を担える貴重な存在です。特に鉄道やバスが十分にカバーできない地域・時間帯において、タクシーが果たせる役割は非常に大きく、MaaS時代における“つなぎの交通”として再定義されるべきタイミングにきています。

さらに、アプリ配車の浸透やデジタル決済の普及により、タクシーの利便性は飛躍的に向上しました。観光、医療、買い物、通勤・通学補助など、地域のあらゆるシーンでの利用が拡大しており、データを活用した運行管理や需要予測が進めば、乗務員の働き方改革や経営の効率化にもつながります。

私は元々、大手鉄道会社で長年まちづくりや新規事業

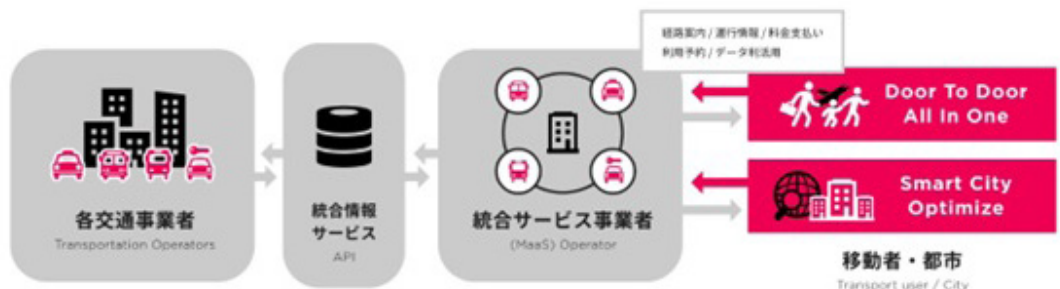
に関わってきました。駅を中心とした都市構造や公共交通のあり方に触れる中で、「移動という行為そのものをもっと柔軟に、暮らしに寄り添う形に再設計できないか」と感じたことが、私が現在のMaaS事業に取り組むきっかけでした。

現在は、MaaS Tech Japanというスタートアップの代表を務め、全国の自治体や交通事業者と連携しながら、MaaSの社会実装を進めています。当社では、地域交通の実情に寄り添いながら、アプリ開発だけでなく、サービス設計、運行支援、事業スキーム構築まで含めた伴走支援を行っています。単なる“IT屋”ではなく、現場と共に動き、汗をかきながら、一緒に仕組みをつくっていく姿勢を大切にしています。

また、私自身が執筆した書籍『MaaS モビリティ革命の先にある全産業のゲームチェンジ』（日経BP）では、MaaSの概念から、日本型MaaSの展望、そして実際の事業化ノウハウまでをまとめています。本連載と併せて、参考にいただければ嬉しく思います。

タクシー業界は、まさに地域と人をつなぐ“最前線”です。MaaS時代の中で、タクシーがどんな価値を提供できるのか、どう進化できるのか。それは、技術革新だけでなく、日々事業経営をされる方々、現場で乗務する方々の知恵と経験こそが鍵を握っていると私は思います。

本連載では、MaaSを単なるバズワードで終わらせず、具体的にどのようにタクシー事業に活かし、未来につなげていくかを、全12回を通じてお伝えしていきます。皆さまの事業の一助となれば幸いです。



* MaaSの概念図